

アントーニャ ブレンターノ夫人 Antonia Brentano (1780-1869)

ベートーヴェンの『不滅の恋人』とされる女性です。

ベートーヴェンの死後間もなく、不思議な恋文（の下書き？）が3通みつかりました。

ベートーヴェンの自筆で、宛名はなく、日付と曜日はありますが、何年かが書いてありません。

ベートーヴェンが大切にしていたものであることは間違いないので、『不滅の恋人』と呼ばれているいろいろな女性が対比されました。当初、その相手は、ベートーヴェンがピアノを教えていた頃の20代からせいぜい30代の初めまでの女性を想定しました。ベートーヴェンは1770年生まれですから、時代は1800年前後です。『月光』を贈られたジュリエッタ・ギッチアルディと、作品78のソナタを贈られたテレゼ・ブルンスウィックの二人が代表格です。

1900年以降に研究が進み、それまでの想定とは違って時代はずっとあとの1812年頃の事件と判明しました。ベートーヴェンはすでに42歳です。そうして相手はアントーニャブレンターノ夫人という人妻で、亭主はフランクフルトの商人の大富豪で、ご夫婦でベートーヴェンの庇護者でもあった方々です。

この夫人とベートーヴェンが、ある保養地で落ち合って……という顛末が明らかになって手紙の内容や、二人の行動その他の記録とも一致するという事情が判明しました。事件は一夜の情事ですが、それでは済みませんでした。

ベートーヴェンの晩年の歌曲に「遙かなる恋人に:” An die Ferne Geliebte” という作品 (Op 98: 1816年作曲) があります。ベートーヴェンにしてはめずらしく、激しい個所がなく短調の要素もごく少なく穏やかで明るい歌6曲からなる連作で、最後に第1曲を変形して終わるというつくりも優れています。詩は、当時21歳の医学生だったAlois Jeittelesという若者が書きましたが、この人は他の詩作の記録がないのでベートーヴェンが依頼したとも考えられます。そうして、この歌の対象がブレンターノ夫人と想定されています。「遠くの恋人を思う」内容ですが、距離だけでなく時間的にも遠くなったと解釈できます。ちなみに、ベートーヴェンの住んでいたウィーンとフランクフルトの距離は600キロあり、東京から大阪を超えて神戸くらい離れています。当時の乗り物は馬車ですから、旅行には最低数日は要したでしょう。

その少し前の1814年に、第8交響曲 (Op 93) が発表されています。後期のベートーヴェンとして異例に明るいこの曲のムードを、ブレンターノ夫人との思い出に包まれていた故と解釈する人もいます。それに、この曲が誰にも献呈されていないのも異例です。

もう一つ、さらにずっと後になってベートーヴェンは『ディアベルリ変奏曲』(1823) という大曲を、この女性に献呈しています。演奏時間が1時間近い大曲で名曲とされますが、私には十分に評価できません。

ブレンターノ夫人のことはインターネットで大量の資料が見つかる他に、次の本もあり読みやすく優れた内容です。

青木やよい ベートーヴェン・不滅の恋人 河出文庫 680 円

著者の青木女史はつい最近なくなりましたが、ベートーヴェンの遺書の中の恋人がブレンターノ夫人と突き止めた最初の 1 人ともみなされます。この青木さんは本書の中で、ベートーヴェンに関して普通と違う下の解釈を述べています。

「ベートーヴェンに対し、女性を追いかけながら振られ続けて結婚できなかった「もてない男」というのが定説で、あのむずかしい顔も、交響曲に代表される重い真摯な音楽もそういう印象を強める……

「ところがとんでもない。実は、大変な艶福家で、多数の女性に音楽を献呈し恋文も書き、そのうちのかなりの人たちと深い交渉があったらしいと考証で判明している……

「ベートーヴェンが生きた 19 世紀初頭は、フランス革命後の特殊な時代背景から性的モラルが極端にゆるやかな時代で、ベートーヴェンが艶福家として生きた証拠が山ほどある……

「大作曲家で大ピアニストは即大スターだから、異性が近付いて当然だろう」

青木氏は「ベートーヴェンは現代でいうシングルライフの先駆的实践者」と言い切っています。

ベートーヴェンが 60 歳前の 1827 年に死んだのに対して、10 歳年下のブレンターノ夫人は 1869 年まで生きて 90 歳直前で亡くなりました。

[諏訪邦夫]